



A A F C 分科会資料	往年の女流ヴァイオリニストの名演奏を聴く(1)	2013年4月14日 霜鳥 晃
エリカ・モリーニ ～ウィーンのエレガンス～ 壘(伊系)(1/2)		

Erica Morini

1904. 1 ウィーン生まれ。父はイタリア人(ヴァイオリニストにして音楽学校経営)、母は生粋のウィーン子。父にヴァイオリンの手ほどきを7歳まで受ける。
- 1912 8歳にしてウィーン音楽学院のマスタークラスに入学。
- 1916 12歳 アルツール・ニキッシュ指揮、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団と共演し、ヨーロッパ楽壇にセンセーショナルなデビューを飾る。
- 1921 17歳 ニューヨーク メトロポリタン歌劇場でU.S. デビューを果たす。前年に亡くなった米女流ヴァイオリニスト、モード・パウエルの、「次の偉大な女流ヴァイオリニストに」という遺言に基づき、愛器「ガダニーニ」を贈られる。
- 1938 34歳 ナチスの迫害から逃れて、アメリカに移住。新天地でよく共演したのは、ナタン・ミルシュテイン、ブルーノ・ワルター、ジョージ・セル、ルドルフ・フィルクシュニーという、時同じくしてヨーロッパから移って来た音楽家を中心であった。
- 1976 72歳で引退するまでの半世紀以上に亘り第1線で演奏活動を続けるが、ほとんど商業録音を残さなかった。
- 1995 91歳 ニューヨークで死去。
- レパートリーはウィーン古典派からブラームス等のロマン派の作品に限定し、極めて狭いが、堅実なテクニック、暖かい情緒的感応の持ち主として知られる。



◆ クライスラー (1875-1962 87y)

美しきロスマリン

(1:36)

ウィーン生まれの彼女は、生涯を通じて、クライスラーの音楽に格別の愛情を注いだ。中でもこの曲は、小意気で愛らしいフレージング処理と鮮やかなリズム感が一体となった、即興性溢れる名演である。(佐藤康則氏ライナー

聴き比べ：パールマン/サンダース、グリュミオ/ハイデュ、クライスラー/ルッ

ノートより)

◆ グルック (1714-1784 74y)

メロディ(精霊の踊り)

(クライスラー編曲)

(3:07)

このよく知られた曲を、彼女は実にさりげなく弾きはじめる。そして感情の高まりと共にゆっくりと織りなされた音楽は、次第にいびし銀のような光沢を放ちながら聴く者を包み込んでいく。豊かな感情に支えられながらも、清潔感を失わない見事な演奏である。(同ライナーノートより)

◆ タルティーニ (1692—1770 78y)

ヴァイオリン・ソナタ ト短調 「悪魔のトリル」 (14:20)

バロックと古典派を結ぶ線上に位置するタルティーニの作品は、彼女のお気に入りのレパートリーであった。旋律を十分に歌わせながらも、けっして音楽の骨格が崩れる事のないのは、曲の全体を把握する彼女の造形感覚が、ひとときわすぐれているからである。この曲の後半部分のダブル・ストップの鮮やかさに、トップ・ヴァイオリニストの一人としての、彼女の矜持を見る事が出来る。(同ライナーノートより)

- 第1楽章 Larghetto affetuoso (少し遅めに 愛情をこめて) (2:51)
 第2楽章 Allegro (速く) (2:58)
 第3楽章 Grave - Allegro assai (厳粛に—非常に速く) (8:31)

(ピアノ) レオン・ポマーズ CD (Westminster) 録音：1955 (モリーニ 51歳)

(室内楽の名手、76年モリーニ引退時のN.Y.デビュー55周年記念リサイタルの共演者)

◆ ベートーヴェン (1770—1827 56y)

ヴァイオリン・ソナタ 第3番 変ホ長調 op. 12-3 CD (MCA-decca) (16:22)

1799年(29歳)作曲。アントニオ・サリエリに献呈。「ヴァイオリン助奏付のピアノソナタ」というが、そうだろうか。ピアノに高度なアルペジオ、半音階などを盛り込み、演奏者にかなりの困難を強いることで有名。

- 第1楽章 Allegro con spirit (速く 快活に) 変ホ長調 4/4 (5:56)
 第2楽章 Adagio con molto espressione (非常にゆっくりと 感情をこめて) 八長調 3/4 (6:03)
 第3楽章 Rondo: Allegro molto (反復再示：非常に速く) 変ホ長調 2/4 (4:23)

録音：1964 (モリーニ 60歳)

ヴァイオリン・ソナタ 第5番 へ長調 op. 24 「春」 CD (MCA-decca) (21:46)

1801年 31歳、耳の病に悩まされつつあった時の作品。フリース伯爵に献呈。

いつ、誰によってともなく「春のソナタ」と呼ばれ、うらかな優しい曲想が愛されてきた。

聴き比べ(第1楽章前半)：ハイフェッツ/ベイ、オISTRAフ/オポーリン、グリユミオ/ハスキル

- 第1楽章 Allegro moderato (程良く速く) へ長調 4/4 (9:21)
 第2楽章 Adagio molto espressivo (非常にゆっくり 表情豊かに) 変ロ長調 3/4 (5:48)
 第3楽章 Scherzo: Allegro molto (諧謔曲：非常に速く) へ長調 3/4 (1:11)
 第4楽章 Rondo: Allegro ma non troppo (反復再示：速く しかし過度にならぬように) へ長調 2/2 (6:26)

録音：1961 (モリーニ 57歳)

(ピアノ) ルドルフ・フィルクシュニー (1912—1994 82y)

チェコのピアニスト、作曲家、1938年 ナチスを拒否し米国に帰化。国際的名声を得る。

◆ チャイコフスキー (1840—1893 53y)

ヴァイオリン協奏曲 二長調 op. 35 LP (Westminster) (MONO) (32:24)

1878年 チャイコフスキー 38歳 親友のヴァイオリニストのイオシフ・コテックの助言を仰ぎながら約1カ月で作曲。大ヴァイオリニストのレオポルド・アウアー(ハイフェッツやエルマンの師)に献呈するが、「技巧的に演奏不可能」と拒絶される。その後3年間全く日の目を見なかったが、1881年 親友のアドルフ・ブロッキー(プロドスキーとも)がウイーンで初演するが、民族臭が強いと不評であった。しかしブロッキーが各地で弾きまくり、次第に多くの人達から支持されるようになった。(志鳥栄八郎氏)

- 第1楽章 Allegro moderato~moderato assai (程良く速く/ 節度のある速さで) 二長調 4/4 (17:45)
 第2楽章 Canzonetta: Andante (歌曲風：中くらいの速さ) ト短調 3/4 (6:09)
 第3楽章 Allegro vivacissimo (きわめて活発に速く) 二長調 3/4 (8:29)

彼女のヴァイオリンは、ここでも余分な思い入れで飾り立てることなく、曲の核心に一直線に踏み込んで行く。

チャイコフスキーの音楽のセンチメントを、これ程美しく、これ程上質に表現した演奏はまれである。丹念に弾きこまれたフレーズの一つ一つがいつの間にか有機的につながって、統一された全体像を形作っていく。聴く者に深い満足感を与える彼女の演奏の秘密がここにある。聴き終わって大きな存在感を感じさせられる演奏である。(同ライナーノートより)

録音：1956（モリーニ 52 歳）

管弦楽：ロイヤル・フィルハーモニー o.

指揮：アルトゥール・ロジンスキー（1892-1965 72y）

クロアチア生まれのポーランド人。1916 年 法学博士。1918 年 ポーランドで指揮者デビュー。

その後渡米。ストコフスキーの下、フィラデルフィア o. に勤め、1936 年 トスカニーニの依頼で、

N B C so の練習指揮者。1943 年 バルビローリの後任としてニューヨーク po の常任指揮者、

次いで音楽監督に就任。その後欧州に戻るが、健康を害し、ウエストミンスターへのレコーディング

活動に専念。代表作はレオポルド・ウラッハと共演したモーツァルトのクラリネット協奏曲。

ご参考 モリーニの他のチャイコン：

フリッチャイ指揮 / RIASso (1952), ホーレンシュタイン指揮/ ナショナル・ラジオ o (1957) 以上